

研究論文

ケアハウス居住者の今後新たにしたい作業の意味とその作業が開始されない理由

齋藤 さわ子¹⁾・坂上 真理²⁾・向井 聖子³⁾・若井 亜矢子⁴⁾・村井 真由美⁵⁾

1)茨城県立医療大学, 2)札幌医科大学, 3)北海道文教大学, 4)札幌医科大学大学院, 5)介護老人保健施設愛と結の街

要旨：地域で生活をする虚弱高齢者への作業を基盤とした健康増進プログラム立案をするために必要な知識を得る研究の一部として、ケアハウスに住む高齢者21名の新たにしたい作業の意味と現在していない理由を探索し、それらの相互関係を理解するため、面接調査を行った。その結果、したい作業には8つの意味（身の回りの充実、気軽、健康維持・増進、活かす、生力の源、取り戻し、挑戦、つながり）があり、作業開始には4つの要因（生活環境、人生における現在の位置、作業遂行能力低下の自覚・予測、作業の優先性）が関係していることが理解された。また、したい作業について語る背景に、生活の在り方に関する信条も関わっていることが理解された。

キーワード：作業選択、虚弱高齢者、健康増進プログラム、ケアハウス

はじめに

虚弱・健康高齢者に対し作業の知識を提供し、自らの作業を見直してもらい、重要な作業をし続けられるよう、また、したいあるいはしてもよいと思える作業ができるように支援をすることで、生活の質や生活機能の向上あるいは低下予防になることが示され始めている¹⁻⁴⁾。作業に焦点を当てた虚弱・健康高齢者の健康と生活の質を維持・向上を目指す予防的支援をするためには、対象者の関心生活領域とそれに関わる作業の情報と理解など、作業に関する多くの知識が重要であるといわれている⁵⁾。しかし、日本において地域に住む虚弱・健康高齢者に適した効果的な支援を行うための作業に関する知識や技術は十分に蓄積されているとはいえない。

虚弱高齢者、つまり身の回りの活動は自立しているが、一人で生活するには何らかの困難や不安のある60歳以上の高齢者を対象とした老人福祉法関連施設にケアハウスがある。高齢化社会においては、医療的支援をほとんど必要としないケアハウスに住んでいる高齢者が可能な限りうまく暮らしていける予防的支援は重要である。近年、ケアハウスにおいて様々な領域の職種による健康増進プログラムが行われその効果が示され始めた⁶⁻⁹⁾。その内容は、体操教室、転倒予防を目的とした運動療法、看護の視点からの健康教室、鍼灸治療などがあるが、作業の視点から生活全般を考慮に入れた支援の報告はほとんどない。川又ら⁹⁾は、ケアハウスではないが有料老人ホーム居住者6名に対して、人間作業モデル¹⁰⁾を応用した作業の視点を意識し

た健康増進プログラムを試み、社会生活機能のみに効果があったことを報告している。

ケアハウス居住者をはじめとした地域で生活をしている虚弱高齢者に対して、作業を基盤とした健康増進や介護予防プログラムが展開されにくく、十分な効果を示せていない理由の一部に、彼らの関心生活領域とそれに関わる作業に関する情報や知識が不足していることがいえる。例えば、高齢者に関わるときの作業の重要な視点として、人は年齢とともに、している作業を変えるものであるが、形態が変わっても作業をする個人の意味や機能は変わらないこと、形態よりもその作業に象徴される意味こそがその人の生活や人生に重要である場合が多いことが知られている^{11,12)}。これは、している・したい作業の意味や機能、それを促進・制限しているものを理解し、その意味や機能に添って、している作業の継続あるいはしたい作業の可能化を支援することで、生活の質の向上や健康増進にもつながる可能性を示す。しかし、ケアハウス居住者など日本の虚弱高齢者のしている・したい作業の意味や機能、それを促進・制限しているものなどを含めた調査・研究はない。地域に住む高齢者の生きがい調査などの一部として「関心ごと」についての調査をしている対象者数の多い先行研究はあるが、そのほとんどがアンケート調査で作業名や表面的な概念を混在し列挙したものである^{13,14)}。このため、何故その作業に興味があるのか、何故したいと思うのか、何故その作業をしているのか、関心があるのにしていない作業があるか、それは何故かなど、個人がその作業に対して持っている

主観的な意味やしていない理由は不明瞭で、作業に付随する高齢者の持つ意味や価値観に合わせた健康増進プログラムを作成するには情報が足りない。そこで、我々は、ケアハウス居住者に対し作業を基盤とした効果的な健康増進プログラム立案に有用な知識を得るため、Aケアハウス居住者を情報提供者として作業に関する研究を行った。この研究では、している・したい作業の維持・可能化への支援に有益であると考えられる、1)「新たにしたい作業」に関する調査と、2)現在の生活上の関心や適応ストラテジーに焦点をあてた調査を行った。本稿では「新たにしたい作業」に関する報告をする。本研究における「新たにしたい作業」とは、現在していないが今後してみたい作業のこととし、過去に経験のない作業から、過去にしていたが今はしていない作業も含むこととした。

本研究の目的は、ケアハウスの居住者の、1)新たにしたい作業の意味および、2)新たにしたい作業があるのに何故現在していないのかの理由を探索し、3)したい意味としていない理由との相互関係を理解することであった。本研究は、情報提供者の新たにしたい作業の意味と、したいのに現在していない理由についての相互関係を理解するため、質的研究手法を用いた。本研究は作業科学を概念的枠組みとし、特に以下の2つの前提において計画および分析を行った。a)人は作業を構成し日常生活を営む作業的存在であり、人が何かをしたいという欲求には心理学的、社会的、象徴的な起源を持つ¹⁵⁾。b)人は一連の日常の作業に参加するだけでなく、自分が時間を費やし行った作業に象徴的意味を付加しそれを創造的に物語る¹⁶⁾。

方法

1. 情報提供者

北海道内の定員40名のAケアハウスの居住者で同意の得られた21名(女性19名、男性2名)で、年齢範囲は71歳から88歳(80.0±5.7歳)であった。居住者はトイレとコンロが一つついた1畳程度の小さな台所がついている6畳程度の個室で暮らしており、浴室は共同である。Aケアハウスの居住条件は、日常生活活動が自立しており、自室の管理が可能者である。施設側が提供するサービスには、食事サービスや月1回の理容サービスのほかに、季節ごとの行事の開催、教会が併設されているので毎朝の礼拝および教会主催のバザーの開催、買い物ツアーやボランティアによる手芸教室などがある。ケアハウス周辺は住宅地で、衣類や日用雑貨品の購入や娯楽施設へはバスまたはタクシーを

利用する必要がある、バス停までは徒歩10分程度である。

2. 手段

調査は半構造化面接を用いた。面接は一人30分から1時間で、内容は、普段どのような生活をしているか、今はしていないが今後してみたいことはあるか、何故してみたいのか、したいことがあるのにしない理由は何故かを中心に、順序は特に決めず、情報提供者が自由に語れるように配慮しながら進めた。今はしていないが今後してみたい作業については、1回の面接からなるべく幅広い「したい作業」の情報を得るために、a)過去にしていた再びしてみたい作業、b)過去に一度もしていないがしてみたい作業、およびc)今より元気だったらしてみたい作業、の3点については少なくとも話が聞けるように面接を進めた。面接施行者は、高齢者を対象とした作業療法の経験のある5名の作業療法士で、一人の面接施行者が居住者3名から6名の面接を行った。

面接内容の録音の承諾の得られた者は14名で、面接中の会話は全て録音し逐語録を作成し記録した。録音の承諾を得られなかった7名については、面接中のメモをもとに会話内容を記載した記録書を作成した。また、面接中の印象メモなども居住者ごとの記録書に付け加えた。

3. 手順

あらかじめAケアハウスに研究目的を説明し、施設側からの研究協力の同意を得た。居住者への研究協力依頼については、a)施設スタッフがあらかじめ研究内容について簡単な説明を居住者に行い、b)面接当日に研究に協力しても良い、あるいは詳しい説明を聞いても良いという意志が得られた居住者を、施設側から面接施行者に紹介するという手順をとった。

面接施行者は紹介を受けた居住者の自室を訪問し、改めて協力の依頼と内容の説明を口頭および書面で行い、同意を得てから半構造化面接を開始した。居住者の自室で面接を行った理由は、a)施設側から居住者が人と個人的な話をするときには自室を好むという情報を得ていたこと、b)面接施行者と居住者は初対面であるため両者の間に緊張がおりやすいと予測されたため、なるべく居住者がリラックスして自らのことを話しやすいように、面接は居住者が慣れ親しんだ環境の方が好ましい、と考えられたからである。

情報提供者のサンプリングについては、施設側から

紹介を受けた居住者は便宜的に全て面接を行うこととしたが、幅広くケアハウス居住者の遂行したい作業を探るため、様々な、居住形態（独居18名、夫婦3名）、居住年数（6ヶ月未満3名、6ヶ月から4年未満3名、4年以上15名）、生活能力レベル（APDLに援助の必要有7名、無14名）、年齢層の人（75歳以下5名、76～84歳10名、85歳以上6名）から意図的に情報が得られるまで行った。面接を行った時期は2月で、データを収集期間は約一ヶ月間であった。

4. データ分析

5名で面接を施行したので、面接情報の内容や深みにずれが生じないように、互いの面接内容や面接時の問題点、質問内容の再検討や確認を、書き起こした逐語録や記録書を元に各面接施行者が面接1回目を終了した時点で行った。サンプリングの条件を含んだ居住者の情報を収集できたところで、以下の手順でデータ分析を継続比較法¹⁷⁾を参考に行った。

まず、面接をした5名のうち4名で、各自面接を行った居住者の中で、遂行したい作業があり録音に同意した者を1名選び逐語録を作成し、調査に関連あると考えられた会話部分を行ごとにコード化した。さらに、その4名で、互いの逐語録を互いに出したコード化を参照せずに行ごとにコード化し、つまり1名の居住者の逐語録を2名が別々にコード化した。次に、そのコードをカテゴリーにまとめ、さらにそのカテゴリー間の関係性の枠組みをつくった。そして、コードとカテゴリーに偏りがいないか、抜けがないか、カテゴリーの関連性に偏りがいないかを検討し修正した。

修正したカテゴリーを元に、第一著者が、サンプリングの条件を満たし逐語録のある居住者のデータから順に、行ごとにコード化しカテゴリーにまとめ、先に現れたカテゴリーと比較をし、新たに必要なカテゴリーが出現した場合には付け加え、修正した方が良いと判断されたカテゴリーは修正を加えながら、比較を繰り返してデータの分析を進めた。同時にカテゴリー間の関係性についても検討しながら行った。データの分析順序は、逐語録の得られた14名から先に分析した。14名から得られた分析結果と、逐語録を得られなかった7名は記録書をデータとして、14名から得られなかったカテゴリーや関係性がないか比較検討した。

結果と考察

逐語録を得られなかった7名のデータからは、逐語録を得られた14名のデータ分析から得られなかった新

たなカテゴリーや関係性は得られなかった。このため、録音を承認した対象者と承認しなかった対象者との間に、このテーマについて大きな違いはないと考えられた。

21名中18名が新たにしたい作業をあげた。あげられた作業名は、スポーツ、料理、旅行、ダンス、カフェでコーヒーを飲む、考古学の研究など多岐にわたり、これまでの健康高齢者対象の調査と類似した結果であったといえる^{12,13)}。新たにしたい作業をあげなかった3名は、「楽しみと趣味のある生活で幸せ」、「したいことは何でもしている」、あるいは「今していることでいい」という言葉に代表されるように生活が現在の作業で十分あるいは充足している人であった。新たにしたい作業をあげた人は、「何もしていない」と現在自分のしている作業を全く評価することがなく現在の作業に空虚感を感じている人や、「充実できない」「好きなことが出来ていない」と現在している作業だけでは物足らなさや不十分さ(不足)を感じている人であった(図)。

以下、新たにしたい作業をあげた18名の、何故その作業を新たにしたいのか、何故したいという気持ちがあるのに現在していないのか、今後するつもりはあるのか、を中心に報告する。なお、新たにしたい作業と現在していない理由、および今後するつもりがあるかについての概念間の関係を図に示し、図に示した語と一致する語を下線で示した。

1) 作業を新たにしたい理由

情報提供者の新たにしたい作業の意味は様々であり、以下の8つの側面が得られた。

身の回りの充実：身なりをきちんとしたいなど、自己の身の回りを充実させる。

気軽：その日その日で参加するかどうかを決めることができ、継続性や到達度を求められず、自分の現在の能力で比較的容易に参加できる。

健康維持/増進：現在の身体あるいは精神機能を維持したり、あるいは向上させ、現在の健康状態を少しでも維持・向上させる。

活かす：過去に経験のある作業で、これまでに積み上げた経験と知識などを用いて、他の人の役に立つ・喜んでもらう、あるいは自分の良さを認められる。

生力の源：生きる励ましとなったり、気分がよくなったり、元気や活力が湧く。時には身体の痛みや、人生が終わるといような考えなど、つらいことから一時的にも逃れることができる、忘れることもできる。

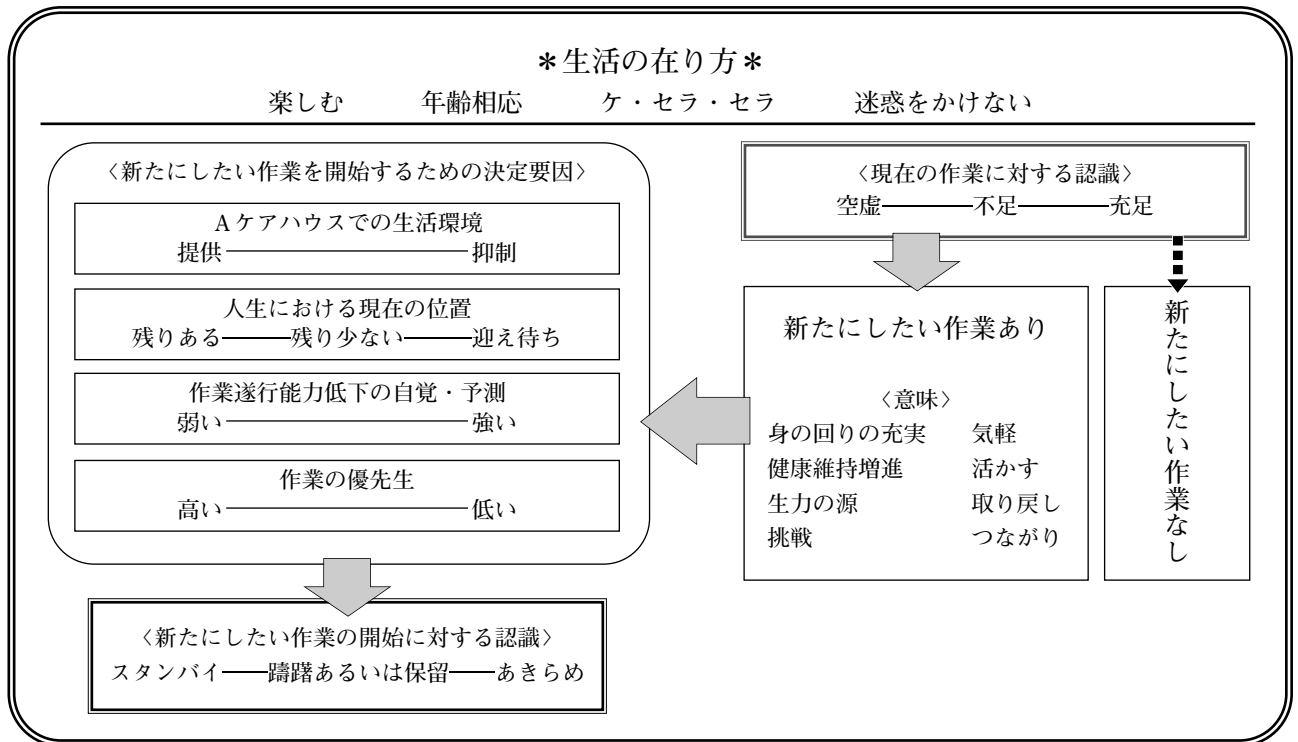


図 A ケアハウス居住者の新たにしたい作業に関する概念関係図

新たにしたい作業の意味と、新たにしたい作業を開始しない理由となる要因、および現在のその作業に対する居住者の状態の関係性を示し、生活の在り方に関する信条が全てに影響していることを示している。

取り戻し：過去にしていたことを再び行い、自分が目指していたことを達成したり、再び過去のように行うことで、過去の自分の生活を取り戻す。

挑戦：過去に一度も経験は無いが、自己の持つ長所や能力がどの程度、他の領域でも発揮できるか応用できるかを試す。

つながり：大切に思っている人との関わりやつながりを維持する。

以下に麻生さん(女性)の新たにしたい作業について語っている一部を例として示す。

「山菜取り好きなんです。〈中略〉山へ行くってったら元気になるんだから。お父さん(息子のこと)たちは、あまり連れて行きたくないんだよね。怪我したら困るとか言ってね。〈中略〉娘なんか登れないところでも登れるから生き生きするの。今具合が悪くても。〈中略〉自分ではあまり食べないけどもね、取ってきて色々作って、子供たちも喜んで、知っている人も喜んだりして〈省略〉」

麻生さんのこの新たにしたい作業は、元気が出てくるような**生力の源**であると同時に、娘よりも技能が高いことを発揮でき、そして人に喜んでもらえると言うような、自分の過去の経験や技術を**活かす**ことができ、

大切な人と**つながり**にもなるという意味を合わせ持つ作業であった。麻生さんの新たにしたい作業のように、新たにしたい作業には、いくつかの意味を併せ持つことが多かった。

2) したいという気持ちがあるのに、現在していない理由

新たにしたい作業があるのに、するに至らない理由には、A ケアハウスでの生活環境、人生における現在の位置、作業遂行能力の低下の自覚・予測、作業の優先性の4つの要因が関与していることがわかった。つまり、したい作業があっても、これら要因が絡み合い、結果的に現在していない作業となっていた。以下に、この4つの要因を情報提供者から話された具体例を示しながら説明する。

A ケアハウスでの生活環境：地域や施設から提供されるサービス、施設の設備、施設のロケーションなど、A ケアハウスで生活する際の環境(物理的および人的環境を含む)のことである。生活環境は居住者に作業をする機会を抑制や提供をし、新たにしたい作業の開始と関係していた。

伊神さん：「馬鹿だね、何も持ってこないの。(弟

子で)腕のいい人に全部くれてやった。花器も何も、だから(ここに)来たらさ、(お花を)しようと思っても何もない。〈省略〉(お花に関して)何もしない、辞めて。(居住者で他にもお花の先生が)いるからここに。〈省略〉玄関のところに生けてあるでしょ。絶対に手を出したり、こうしなさいっていうことは絶対にしない」

伊神さんは、生け花の師範で教えていたが、施設に入る前に道具を人に譲り手元にないため、現在の環境では生け花をするには制限がある状況であった。また、Aケアハウスには他にも生け花の師範がいて、その人達がすでに施設内を生け花で飾る役割を担っており、その人達への配慮から、施設内で師範としての腕を活かし施設内を飾るという作業に関わることも抑制されていた。

瓜生さん：「(パークゴルフを)今年は何とかやろうかなって。パークゴルフって、こうちょっと屈んですの。で、向かいの奥さん(瓜生さんの部屋の向かいに住んでいる居住者)が、あんたちょうど(腰が)屈んでいるから、ちょうどいいんじゃないって。今年は何とやってみようかな。」

瓜生さんの場合には、新たに作業をするきっかけ作りを提供してくれる人がいるという環境にいますが、調査をした時期が冬であるうえにAケアハウスが北海道という地に建っているため、雪のためパークゴルフ場が使えず、始めることを抑制された状況にあった。

人生における現在の位置：「人生の終着駅なんです」、「迎えを待つ」、「余りの人生だから」と表される、人生のどの辺を自分が生きているのか、人生があとどの位残っているかという認識が、新たにしたい作業への開始と関係していた。

江頭さん：「こなして(このような毎日を送って)、一生終わってしまうんだなあとって。あと短いのもったいない。〈中略〉いっぱい、なんか、習いたいことあります。」

小川さん：「(新たにしたいと思っている作業を)なんでしないかって、人間70を越えるとだめ、(天からの)迎えがちらつくから。」

概して、「残りの人生は短い」という意識が少ない人ほど、新たに作業をすることを前向きに捉える傾向にあった。しかし、残りの人生が短いと感じていても、江頭さんのように、短いからこそ現在している作業以外のことも開始したいと語る人もいた。

作業遂行能力低下の自覚・予測：若い頃の自分や数年前の自分との比較から遂行能力の低下の自覚、あるいは

自分自身の能力の低下はさほど感じないが、周囲に徐々に低下している人がいて、自分もいずれ長くない先になるのではないかという予測が、新たにしたい作業の開始と関係していた。

鹿島さん：「(コーラスをしていた。辞めたきっかけは)若い人との違いを感じるようになったんです。若い人が多かったから次から次へと新しい曲を覚えるんですよ。若い人の多かったので。」「年取ると声が低くなってきますでしょ。」「音楽が好きだから、歌がまたやりたいわね。コーラスね。声がでなくなりましたけどね。高い声でませんよ。これでも、昔は音域の広いほうだったんですけど。〈省略〉自分のペースで出来ないというのがいやなんですよ。」

鹿島さんは、コーラスには思い入れが強く、再びしたいと思っている。しかし、上記に示されるように周囲とのペースの違いや音域の低下などから自分の能力の低下を自覚や予測をしているため、コーラスへの参加ができないでいた。

作業の優先性：現在、生活を構成している作業の遂行必要度が新たにしたい作業の開始に関わっていた。

木村さん：「お針のようなことが好きなので、したいと思うことはあります。教えに来てくれるならしたいけど、習いに(外へ)行くとなると、結構忙しいので、なかなかする時間が見つからない」

栗林さん：「本当は、結構こういうこと(手芸)が好きなので、もっとしたいと思うけど、生活のことが在りますから、そればかりはしてられないですから」

二人とも、したい作業はあるが、現在している優先される作業があり、その作業を辞めてまでもする気はなく、あるいは折り合いをつけるのが難しいため、開始できないでいた。

3) 新たにしたい作業の開始予定

情報提供者が新たにしたい作業を今後開始するかどうかについては、スタンバイ、躊躇、保留、あきらめの4つの状態があることがわかった。それぞれの状態の説明を下記に示す。

スタンバイ：作業をする準備ができている、あるいは条件を整えばいつでも行おうと思っている。

躊躇：作業をしたいというはっきりとした意志があり、実際に始められる状況にあっても、信条から「しても仕方ないかもしれない」「しないほうがいいのかもかもしれない」という思いがあり、その作業を始めることがためらわれる。

保留：作業をしたいと思う気持ちはあるが、現在障壁があるので、生活に取り入れるかどうかを具体的に考えられない。現在障壁となっている理由が取り除かれた時に、改めてその作業を自分の生活に組み込むかどうか考える。

あきらめ：作業をしたい気持ちはあるが、現在ある障壁が取り除かれるわけがないと信じているので、その作業をすることは不可能であると決め付ける。

開始するに至らない4つの要因と開始するかどうかの4つの状態との関係は、図に示すように、例えばAケアハウスでの生活環境が作業遂行を抑制が強ければ強いほど、時期に迎えが来るのではないかと感じれば感じるほど、作業を遂行する能力の低下を自覚すればするほど、また現在の作業を遂行するのが精一杯であればあるほど、したい作業に対する姿勢はあきらめの状態へと向かう傾向にあった。また、ある要因にだけ問題があり、他の要因に問題がなくても、その要因が強く作用し、あきらめの状態になる場合もあるし、ある要因問題が大きくても、他の問題がないため、あきらめの状態にならない場合もあった。

4) 「新たにしたい作業」について語る背景

新たにしたい作業名をあげ、何故その作業をしたのか、何故したいのにしないのかを情報提供者が語る背景には、どう自分の生活が在るべきか、毎日をどう送るべきかという情報提供者の生活の在り方に関する信条が存在し影響を及ぼしていた。その生活の在り方に関する信条には、周囲になるべく迷惑をかけずに暮らすあるいは死ぬ準備をしていくこと（迷惑をかけない）、先々のことは考えずにその日その日で無理なく暮らすこと（ケ・セラ・セラ）、年齢にふさわしい生活すること（年齢相応）、生活を楽しむことに徹すること（楽しむ）ことが、語られていた。

小林さん「(元気な頃は) いつも外にいたよ。(今は) 行きましようって誘われていっても、ささっと歩けないでしょ。皆より倍ぐらいかかるから、迷惑がかかるでしょ。きにしないでいいとってくれても、私のほうばかり付きっきりになると、用事のある人がね・・・」

小林さんの場合、もともととても活動的な人で、それを理解しているケアハウススタッフや他の居住者から部分的な援助の申し出があっても、活動への興味の有無に関わらず今は迷惑がかかるという理由で人に援助してもらわなければならないことはしないと決めていた。そして現在している作業は、一人で行えてかつ他の人に喜んでもらえるような作業を選択してい

た。

佐島さん「やりたいことはいっぱいあるよ」「(切手を) 収集したり、何かをはじめたりすると道具が増える。自分が死んだ後に始末をする人のことを考えると迷惑がかかる。良く考えないと、死んでまで人に迷惑はかけたくない。そもそも、ここには親戚など人に迷惑をかけないために入った。」

佐島さんの場合は、したいことがたくさんある反面、自分のすることが将来的なことであっても人に余計に迷惑がかかるかもしれないという思いが新たな作業の選択に関係していた。

その他、ケ・セラ・セラを意識している情報提供者は、その日その日に参加を決められる気軽な作業をしたい作業としてあげたり、最初からかなり努力をしないといけないような作業をしたい作業としてあげて避ける傾向にあった。年齢相応を心がける情報提供者は、人から見ても勢い過ぎずゆったり過ごせるように一日の作業構成について考えていた。したい作業を開始するかどうか、上記の2)にあげた開始に関する要因だけでなく、したい作業を実際に開始することが、自らの生活の在り方に沿うものかどうかによっても決められていた。

Aケアハウスにおける健康増進プログラム立案・運営への示唆

本研究の結果から、したい作業の意味、何故そのしたい作業をしていないかを理解することができた。本研究結果から、Aケアハウスの居住者の新たにしたい作業をする意味は8つあることが得られた。居住者は一つの作業に対し、これら8つのうちのいくつかの意味を同時に合わせもつことも多かった。このことから、居住者にとって魅力的な作業を企画・提供を行う際には、居住者にとってこれら8つの意味のいくつかの意味を同時に含まれるような配慮が必要であると考えられた。

したい作業を開始しない理由には、Aケアハウスでの生活環境、人生における現在の位置、作業遂行能力の低下の自覚・予測、作業の優先性が深く関係していることがわかった。このことから、居住者がしたい作業をしている作業へと実現できないでいる場合には、特にこれら4つの側面の現在の状況を評価しどの側面が障壁となっているのかを、まずは把握することが重要であることが示唆された。また、集団プログラムとしては、Clark等の高齢者研究で用いられた、作業と老化、作業を通しての健康、時間と作業、人間関係と

作業といったトピックを用いたアプローチも有用であると考えられた¹⁾。

したい作業を開始するかどうかの状態には、スタンバイ、躊躇、保留、あきらめの4つの状態があることがわかった。この状態の違いは、アプローチの仕方を変えなければならないことを示唆する。例えば、スタンバイ状態にある人なら、障壁をなくす援助を行えば、している作業へと移行するであろうが、躊躇や保留の状態にある人の場合には、目の前の障壁を取り除くだけでは開始には至らないことを、プログラム運営をする際には理解している必要がある。また、あきらめの状態にある人は、スタンバイの状態にある人よりも、したいといった作業への実現には消極的かもしれないことにも配慮が必要であることも考えられた。

したい作業名をあげたり、その作業を開始するかどうかなど、したい作業の背景には、年齢相応、迷惑をかけない、楽しむ、ケ・セラ・セラという生活の在り方に関する信条があることがわかった。このことは、したい作業への援助を行う際、その作業開始だけに囚われず、その援助が、どのように生活をおくるべきかという居住者の信条に一致した援助となるのかどうかの配慮をしなければならない。一致していなければ、新たにしたい作業が開始されても継続されないかもしれないことも考えられた。

本研究の制限

本研究は「新たにしたい」作業がなかった全くなかった居住者に焦点を当てた研究ではなかったため、「新たにしたい」作業がなかった情報提供者は3名のみであった。このため、したい作業がなかった理由については本研究で示されたもの以外もある可能性が高い。新たにしたい作業のなかった理由を明らかにするためには、別の研究が必要である。

本研究の結果は、面接者と情報提供者が初対面で行われた1回の面接で得られた語りから得られたものであり、その範囲における「新たにしたい」作業の意味の発見としたい作業をしない理由に関する理解である。面接者との信頼関係を深め、数回の面接を重ねたデータから得た理解とは一部異なる可能性はある。さらに、対象者がAケアハウス居住者と限定されている上、質的研究手法を用いているため、本結果は一般化できない。ケアハウス居住者に一般化して用いるには、さらに様々なケアハウス居住者を対象とした研究が必要となる。しかし、本研究の結果は、新たな作業に関する知識を提供するので、類似した属性の高齢者に対

象とした健康増進プログラムの立案の際に役立つであろう。また、さらなる新たな作業に関する知識を得る研究の手がかりになるであろう。

まとめ

Aケアハウスの居住者に1)どのような作業が新たにしたいのかその意味を探索し、2)新たにしたい作業があるのに何故現在していないのかを理解する目的で、研究を行った。この結果、したい作業には8つの意味があり、作業開始には4つの要因が関係していることが理解された。また、したい作業について語る背景には、生活の在り方に関する信条も関わっていることが理解された。これらは、作業を基盤とした健康増進プログラム立案・運営への示唆を与えると考えられた。

文献

- 1) Clark F. Azen SP, Zemke R, Jackson J, Carlson M, Mandel D et al: Occupational therapy for independent-living older adults - A randomized controlled trial. *Journal of the American Medical Association* 287:1321-1326, 1997.
- 2) Clark F. Azen SP, Carlson M, Mandel D, LaBree L, Hay J et al: Embedding health-promoting changes into the daily lives of independent-living older adults - Long-term follow-up of occupational therapy intervention. *Journal of Gerontology; Psychological Science* 56B:60-63, 2001.
- 3) 西上忠臣, 吉川ひろみ, 辻郁, 西方佳子: 作業療法でヘルスプロモーションと介護予防. *作業療法24(特別号)*:393, 2005.
- 4) 川又寛徳, 山田孝: 有料老人ホームで生活する自立した高齢者に対する人間作業モデルに基づく予防的・健康増進プログラムの効果に関する予備研究. *作業行動研究*11(2):73-79, 2008.
- 5) Mandel DR, Jackson JM, Zemke R, Nelson L, Clark F: *Lifestyle Redesign*. Bethesda, MD: The American Occupational Therapy Association, Inc, 1999.
- 6) トンプソン雅子, 中村好男: ケアハウス居住者を対象とした体操プログラムの開発と参加への動機および参加促進要因に関する事例報告. *老年社会科学*, 30(1): 79-89, 2005
- 7) 小松泰喜, 朴眩泰, 上内哲男, 上岡洋晴, 岡田真平他: 高齢者福祉施設(従来型ケアハウス)居住者への運動・生活指導による効果の検証. *理学療法* 24(3):489-494, 2007.

- 8) 堀みゆき, 小西美智子, 小野ミツ: ケアハウス居住者に対する介護予防・生活自立支援を目的とした健康教室に関する研究. 日本地域看護学会誌 8 (2):51-57, 2006.
- 9) 松本勅, 寺沢宗典: 特養及びケアハウス居住者のQOLの向上を目的とした鍼灸治療の試み. 日本老年医学会雑誌38(2):205-211, 2001.
- 10) Kielhofner G (山田孝監訳): 人間作業モデル—理論と応用 改訂第2版. 協同医書出版, 1999.
- 11) 村井真由美, 小川小枝子, 石川恵美子: 現在行っている作業を形作っている過去の作業を理解すること—老人デイケアの一利用者を通して—. 作業療法21 (特別号), 172, 2002.
- 12) Jackson J: Living a meaningful existence in old age. In Zemke R, Clark F (Eds.), Occupational Science: The evolving discipline. F.A.Davis, Philadelphia, 339-361, 1996.
- 13) 栞形俊子: 高齢期の余暇と家族. 染谷・編, 老いと家族. ミネルヴァ書房, 京都, 81-105, 2000,
- 14) 足立正樹, 村上寿来: 高齢者の社会参画によるアクティブ・エイジングの実現に関する調査研究報告書. 兵庫県ヒューマンケア研究機構長寿社会研究所, 兵庫, 2002.
- 15) Yerxa EJ, Clark F, Frank G, Jackson J, Parham D, Pierce D et al: Occupational Therapy in the twentieth century: A great idea whose time has come. Occup Ther Health Care 6(1):7, 1990.
- 16) Clark F. Parham D. Carlson M. Frank G. Jackson J. Pierce D. et al: Occupational science: Academic innovation in the service of occupational therapy's future. Am J Occup Ther 45:300, 1990.
- 17) Glaser B, Strauss AL: The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research. Aldine Publishing Company, Chicago, 1967.

Meaning of occupations which elderly people living in an assistive living home hope to do
and their reasons for not starting the occupations

Sawako Saito¹⁾, Mari Sakaue²⁾, Ayako Wakai⁴⁾, Seiko Mukai³⁾, Mayumi Murai⁵⁾

1) Ibaraki Prefectural University of Health Science, 2) Sapporo Medical University, 3) Graduate School of Health Science, Sapporo Medical University, 4) Hokkaido Bunkyo University, 5) Elderly Nursing Facility "Ai to Yui no Machi"

The purposes of the research were to explore 1) the meaning of occupations which elderly people hope to do, 2) their reasons for not starting the occupations, and 3) their interactions. Informants in this research were 21 elderly people who live in an assistive living home called "Care house". Data were collected with semi-structured interview by five occupational therapists. On the basis of interview data, eight meanings in the occupations which they hope to do were identified: improvement of self-maintenance, improvement of health, easiness, making oneself valuable, source of energy, taking back their younger-self, challenge, and relationship with other. Their reasons for not starting the occupations were related to 4 factors: environment of the care house, perceived present position at life stage, awareness or prediction of declining occupational performance ability, and priority for present occupations. We also found that their beliefs about what their daily life should be are important factors to choose the occupations and not to start the occupations. Four beliefs emerged from the data include taking pleasure, avoiding being nuisance, living within one's age, and que sera sera. The results of the research would give some idea to plan health promotion programs for elderly living in an assistive living home.

Key words: Occupational choice, Elderly, Health promotion program, Care House (assistive living home)